

# 福音書

日本基督教団  
塚口教会  
〒661-0012  
尼崎市南塚口町  
2丁目34-3  
電話 06-6429-3019

## 恐ろしいほどの「福音」

マルコによる福音書 一六・一一八

沖村裕史

終わりから、今が、そして何がほんとに大切なか、何が真実なのかが見えてきます。終わりから生きる、終わりを生きることの大切さは、年を重ねるごとに、身に沁みて分かって参ります。

終わりから。小説や物語と呼ばれるものの多くもまた、作者が、それがどのように終わるかを知っていて、その終わりに向かって筋立てを作り上げるという意味で、終わりから、「後ろ向きに」書かれています。わたしたちの福音書も、例外ではありません。二年間をかけ、わたしたちは、今漸くこの福音書の結び一六章に、「終わり」に辿り着いたのですが、むしろ、やっと「始まり」に辿り着いた、と言うべきなのかもしれません。マルコは、明らかにこの福音書がどこに向かっているかを知っていて、その方向に向かつてこの福音書を書き上げています。

わたしたちが自分自身の死から誕生へと振り返る時初めて、わたしたちの人生とは何か、それがどれほどかけがえのないものなのか、自分の人生を、自分という存在自体を本当の意味で味わうことができるように、福音書もまたこの結びを無視して読むことも、解釈することも、存在することさえできません。この福音書は終わりにおいて

て生まれ、再生された物語であり、この終わりによって、わたしたちはこの福音書のメッセージ、一章一節に「神の子イエス・キリストの福音」と書かれていたことの、本当の意味をはっきりと知ることができると言えてよいでしょう。

では、この福音書の最後、終わりの言葉は何か。一六章八節の言葉です。

「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」

驚かれるかもしれませんが。これを、原文通りに訳せば、次のようになります。

「そして、(女たちは) 誰にも何も言わなかった。彼女たちは恐ろしかったのである。なぜなら……。」

マルコは、この福音書を文の途中でいきなり終わらせています。「なぜなら」という接続詞で終わるのです。ほとんどの聖書は、このぎこちなくて据わりの悪い結びの一文を自然に読むことができると、これを意識するか、あるいは無視します。古代、聖書を筆写した写字生たちは、「なぜなら」というこの一語の後に、大幅な加筆をしました。それが九節以下の「結び一」と「結び二」です。いずれにせよ、本来の福音書は、この一節から八節で終わりです。これが、この福音書の結びであり、結論です。最後の言葉です。

そして、自由に文を続けることを許すかのような「なぜなら」というこの言葉の直前に、その意味では、最後の最後となる、意味ある一語が記されます。

「恐ろしかったからである。」先ほども申しあげたように、この福音書は、イエスのみ言葉とみ業によって示された福音を書き記したものです。福音とは、人がこれが本当の信仰ですよ、これこそ良き知らせ、これを喜びなさいということですが、ところが、その喜びの福音を書き記した書の最後の最後が、「恐ろしかった」、恐ろしかったから逃げた、です。一体、どこに恐ろしいことがあったのか。どこに恐ろしくて逃げ去ってしまったようなことがあったのでしょうか。

素直に読めば、自分たちの予想もしなかったことだったから、というほかありません。そこにあると思っていた死体がなくなっていた。甦ったと言われた。もし、「ああ、よかった、嬉しかった」、そう書いてあったとしたら、わたしたちはむしろこれを信じ難いと思うのではないのでしょうか。しかしそれは書かれません。そのことが恐ろしかったのです。およそ非現実的な、現実的でないことが、ここに起こっている。

聖書は、イエスの復活について、イエスが甦ったというのではなく、「甦らされた」と受動態で表現します。イエスが一人で十字架について、そして「やあ」と言って、また出てこられたというのではありませぬ。

死ぬということとは、どなたもがご存知のように、実に厳しいことです。誰も死にたくない、この人を死なせたくない。それでも死ねば、これは神がお取りになった、神が死なせられた、そうとしか説明のしようのないものです。それならば、その神によって甦らされたというほかありません。

いのちは自分のものだと信じている人は、いのちは自分の自由にしてよいものだと考えます。ところが実際には、生まれることも死ぬことも、わたしたちの自由にはなりません。いのちはただ与えられ、ただ取ら

れるものだ、としか言いようのないものです。聖書はそのことを、神がいのちを与えられた、それはわたしたちのものではない、わたしたちが自由にしておいてよいものではない、だからこそ、自分のいのちも人のいのちもかけがえのないものです。しかも、いのちを与えてくださったのは永遠の神です。

その神が主を甦らされたのだと、この出来事は教えています。この婦人がここで見たものは、「ああ、神がキリストを甦らせたのだ」ということを示すものです。神のみ手が働いていることに気がついた、ということですが。あるはずの死体がなくなりました。それを見ていると、確かにここには誰かの手が加わった。それは誰の手か。神のみ手が加わった。そのことに彼女たちは気がついた。神の手がここに働いたことを信じないわけにはいかなかったということです。復活の朝、もちろん、キリストが甦らされたことに、わたしたちも驚かざるを得ません。その恐ろしさを感じます。しかし、それと同時に考えなければならぬのは、キリストを通して、神がわたしたちの生活の内に働かれた、ということですが。それは、クリスマスと同じです。

復活を信じて思うことは、わたしたちのこの生活の中に、神が働いていらつしやるということですが。そのことを、わたしたちは考えなければなりません。人間がうまいことをしているだけだ、人間なんてそんなものだ、わたしたちは高を括りやすいものです。ところが、イエスの復活が教えることは、そうではありませんでした。神が働いておられる。この歴史の中に、わたしたちの貧しい生活の中に、神が働いておられるということですが。そして、それを知る

(二〇一六年三月二七日、復活節礼拝)